

ちょっと ブレイク しませんか?

第 26 回

チャンス [1979年 米国]



イソップ寓話と映画の題材のかけあわせもそろそろネタが尽きかけてきた。そろそろ「ちょっとブレイク」も長期断筆と思ったが、あ～る編集部の皆様に「社員に好評なので是非」とおだてられ、今年度もない知恵を絞ることになった。褒められると悪い気はしない。叱責よりも褒める方が社員の士気を高めるかも知れない。

イソップ寓話集に「ゼウスと動物と人間」と題する小話がある。伝えられるところによると、原初、動物が創られた時、ある者は強さ、ある者は速さ、ある者は翼というように、めいめい神の恵みをいただいた。ところが人間は裸のままに置かれたので、「私だけ恩恵に与(あずか)れぬまま放っておかれた」と訴えた。するとゼウスが、「最も大きなものを授かっているが、その贈物に気がついていないな。お前は理性を手に入れているのだ。それは神々の世界でも人間の世界でも力をもち、強きものよりもなお強く、最も速きものよりもなお速いものなのだ」と答えた。ここに至って人間は贈物を知り、跪拝(きはい)し感謝を述べて立ち去った。

「ピンクパンサー」シリーズで有名なピーター・セラーズという喜劇俳優主演のシリアスな作品が、今回紹介する「チャンス」(1979年 米国)だ。

ワシントンの古いお屋敷の主人が、ある朝突然死んだ。残された中年の庭師ガーディナーチャンス(ピーター・セラーズ)と黒人のメイド。チャンスは、ここ数十年屋敷の外へは一步も出たことがなく、読み書きもできず、ひたすら庭いじりとテレビを観る楽しみだけで生きてきた男だ。やがて管財人に屋敷を出るように言われたチャンスは、街の喧騒の中に飛び出すことになる。井の中の蛙が社会に初めて出て、聴くもの、見るもの、出合うもの全てが新鮮で、気もそぞろになっていたチャンスは、自動車とぶつかってしまう。高級車の中に乗っていた美しい貴婦人に手当てをするので家に寄って欲しいと言われた。車の中でその貴婦人イブ・ランド(シャーリー・マクレーン)に名を問われ、「庭師(ガーディナー)チャンス」と名のる。なぜかチョンシー・ガーディナーと聞き違えられてしまう。

やがてその車が着いたのは経済界の大立物ベンジャミン・ランドの大邸宅で貴婦人は彼の妻だった。ランドは高齢で健康状態もすぐれなかったが、チャンスの子供のような無垢さに接していると気持ちが安らぐのを感じた。数日後、ランドの見舞いに訪れた大統領は、そこでチャンスと会い、庭の手入りに例えた抽象的で概ね楽観的な意見に耳を傾けた。大統領はさっそくTV放送でチャンス言葉を引用し、それをきっかけにチョンシー・ガーディナーの名は一躍全米に知れ渡るようになる。それからチャンスTV出演などの奇妙な生活が始まるが、彼の本当の正体を知る者はいなかった。やがてランドが大往生を遂げ、その葬儀の際チャンスはイブから愛の告白を受けた。そして大統領の葬送の辞で新大統領候補がチョンシー・ガーディナーであることが明らかにされるのだった。世俗の色、金、名誉とは無縁で、純粹無垢に生きている人間が、誤解というか、新鮮な評価というか、兎にも角にも脚光を浴びるというサクセスストーリーで、まさかこんな話があるはずがないと思いながら、最後までではらはらどきどきしながら見てしまう奇妙な作品だ。

人間は皆、理性的存在として神から名誉を与えられているのに、その名誉に気づかぬばかりか、感覚も理性もため動物を羨む者もいる、という喩えだ。チャンスchancelには、機会、偶然、運といった意味がある。貴方もチャンス到来に気づいていないだけかも。



かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長